Memory world

左リュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｍｅｍｏｒｙ　ｗｏｒｌｄ

【Ｎコード】

Ｎ７０００Ｙ

【作者名】

左リュウ

【あらすじ】

Ｍｅｍｏｒｙ　ｗｏｒｌｄ。世界でトップと称されるゲーム会社、「クリエーション社」が開発した新作となる、ＶＲＭＭＯゲームである。このゲームのオープンベータテストに抽選で見事当選した鳴海翔太郎（なるみしょうたろう）は、ひょんな事から一緒に行く事となった学校のアイドル、星野唯（ほしのゆい）と共に、「クリエーション社」へと向かった。道中に出会った少年、照井嶺浩を仲間に加え、共にテストを行う翔太郎。倒したモンスターのメモリを『コレクション』し、その力を使い、ゲームを進める中、翔太郎達は、ログアウト不能という驚愕の事実を目の

当たりにする。こうして、本当のゲームが、幕を開けた。……そして、翔太郎にはある特殊な能力が備わっていた……※ログアウト不能のＶＲＭＭＯ物です。多分、主人公最強（予定）

ログイン

Ｍｅｍｏｒｙ　ｗｏｒｌｄ。
世界でトップと称されるゲーム会社、「クリエーション社」が開発した新作となる、ＶＲＭＭＯゲームである。
発売前から、その噂はネット上を飛び交い、発売前であるにも関わらず瞬く間に好評を博している。
そして、俺、鳴海翔太郎（なるみしょうたろう）も、そんな発売前の「Ｍｅｍｏｒｙ　ｗｏｒｌｄ」を楽しみにしている、ゲームユーザーの一人だ。
何しろ、実際に仮想空間へと行くことが出来るゲームなのだ。
今まで、実際にＶＲＭＭＯゲームというのは現実には作られることは無かったのだが、しかし、ついに世界一と称されるゲーム会社が作ってくれた、というワケだ。

そしてなんと、俺はそんな世界初のＶＲＭＭＯゲームのオープンベータテストに抽選で当選し、参加出来る事となったのだ。
こういう時に素晴らしいくじ運を発揮できる俺を褒めてやりたい。

……いや、言い方を間違えた。

正確には、一人では、無い。

とは言ってもまあ、これが俺のご機嫌要因である内の一つ、なのだが。
現在、俺は（正確には俺達は）とある電車の中に居る。
これはクリエーション社が手配してくれた電車で、直でテスト会場まで向かうという電車だ。そして、この電車に乗っているのは全員、今回抽選で選ばれた、テストユーザー達、という事だ。

さて、そろそろ俺と一緒に居る人物を紹介しよう。

「ねえ、鳴海くん」
「ん？」
「まだかな？」
「もうすぐじゃないのかな」

現在、俺の隣には一人の可愛らしい女の子。
抽選で当たったテストユーザーには、一人の同伴が認められている。そして俺が連れてきたのが、この「星野唯（ほしのゆい）」だ。

この星野は、俺が通う高校でのいわゆるアイドル的存在だ。
成績優秀。
スポーツ万能。
才色兼備。

しかし、そんな星野には意外な趣味があった。

それが、ネットゲームである。
星野は別にアイドル的存在だから学校内で威張ったりはしない。むしろ、誰にでも優しい。

そして、ある日俺が友人に思わず「Ｍｅｍｏｒｙ　ｗｏｒｌｄ」のテストユーザーに選ばれた事を自慢していると、それが星野にも聞こえていたようで、そしてその日の放課後。
俺は星野に呼び出された。
最初は、告白かと思った（今思うとそれは勘違いで恥ずかしい。そもそも、星野となんて数えられる程しか接した事が無いというのに）。
しかし、星野が最初に言葉を発したのは、

「お願いします！　私にも『Ｍｅｍｏｒｙ　ｗｏｒｌｄ』のオープンベータテストに参加させてください！」

だった。
こうして、星野の意外な趣味が俺には解ってしまったのだ。
ガッカリなんかしてないよ？　だって学校のアイドルと二人で電車に乗れちゃうんだから。
うん。別に悲しくなんか無い。涙なんて、出るわけないのだ。

そんなこんなで、Ｍｅｍｏｒｙ　ｗｏｒｌｄのオープンベータテスト当日を迎えた。
朝に駅前で集合すると、星野はなんとも可愛らしい格好で俺を待っていて、俺を見つけると笑顔をくれた。
その後、テンションが上がった俺は意気揚々と、星野と一緒に電車に乗り込んだのだった。

はい。回想終わり。

「おっ。仲が良いな。カップルか？」

回想を終えた俺と、ぼーっ、としていた星野に、席の近くから声がかけられた。
声の主を見てみると、俺達のすぐ側の席に、一人の少年が座っていた。

「悪かったな。カップルじゃ無くて」
本当に残念だ。
「ははっ。すまんすまん。アンタ達もやっぱ、テストユーザーに選ばれたんだよな？」
「ああ。で、お前は誰だ？」
「自己紹介が遅れたな。俺は照井嶺浩（てるいみねひろ）。アンタ達と同じ、テストユーザーだ」
「俺は鳴海翔太郎」
「私は星野唯です」

ぱっと見は結構気さくな奴だ。
それにしても、どうして俺達に声なんかかけてきたんだろう。

「どうして声をかけてきたのか、って言いたそうな顔をしてるな。まあ話してみると答えは簡単だ。テストユーザー同士、ゲーム内で協力出来る仲間が欲しいと思ってな」

ああ、成るほど。
ふむ。それは悪くない話だろう。
何しろまだまだ未知のゲームだ。仲間が居て、今の所は不利になる事もないだろうし、それに、ゲームは皆で楽しくやる方がが面白いのだ。
これ、俺の持論な。

「俺はいいけど、星野はどうする？」
「勿論、ＯＫです」
「決まりだな」

こうして、俺と星野は照井という新たな仲間を迎え、テスト会場までの道中を電車に揺られながら一緒に話しをしたりしながら、楽しんだ。

テスト会場は、クリエーション社の本社で行われる。
実はテスト会場は本社だけでは無く、日本中のあらゆる所で行われ、そしてテストユーザーは招待者を含めて約４万人らしい（という事は抽選に当たったのは大体２万人ぐらいか？）。
そして、俺達の場合はたまたま本社でテストする、という事になったのだ。

テスト会場につくと、ザワザワと大人数の人がクリエーション社のビルの前に集まっていた。
しならくすると、案内人と思われる人がビルの中から出てきて、それぞれ何グループかに分けられて、テスト会場へと案内された。
俺達は同じグループに入る事が出来た。

テスト会場は、白い部屋だった。
そして、真っ白な空間の中に、それと対比するような真っ黒な球体が何台か設置されていた。
案内人の人が、俺達に、とあるブレスレットを配布した。
説明を聞くと、どうやらこれが、ゲームの起動に必要らしい。
そして、このブレスレットを聞き手に付け、そして球体の中で、ゲームが起動する。
ゲームの説明は全て、ゲーム内で行われるらしい。

「んじゃ、ゲームスタート地点に『中央広場』ってトコがあるらしいから、まずはそこに集合な」
「解った」
「解りました」

俺達はそれぞれユーザーネームを教えあい、ゲーム内で最初に集まるという町で集合するように決めた。

そして、俺は黒い球体の中に入った。

中には黒いシートのような物があり、俺はそこに座る。

座った途端、目の前に画面のような物が表示された。そこに、次々と白い文字が表示される。

ユーザーを確認しました。

Ｍｅｍｏｒｙ ｗｏｒｌｄ．Ｓｔａｒｔｉｎｇ

こうして、平凡な俺と、学校のアイドルと、道中に出会った気さくな少年と出会い、俺達のＭｅｍｏｒｙ ｗｏｒｌｄが幕を開いたのだった。

1―1　ユーザー

ユーザーネームを設定してください。

ユーザーネーム：Ｌｅｆｔ

ユーザー情報を習得中……

ユーザー情報の習得に成功しました。

初期装備を選択してください。

剣・太刀・双剣・槍・杖・銃・弓・ハンマー

装備「太刀」が選択されました。

タイプ「剣士」が選択されました。

必要情報の登録を確認。

ユーザー名「Ｌｅｆｔ」さん。

Ｍｅｍｏｒｙ　ｗｏｒｌｄにログインします。

□□□ＮｏｗＬｏａｄｉｎｇ□□□

目を開けると、そこには見慣れない、西洋の広場のような物が広がっていた。
周囲には同じく、ログインしてきたであろうプレイヤー達が居る。
ここはどこだろうか。
きょろきょろと辺りを見回してみると、大きな看板に「中央広場」とある。

ここがスタート地点か。
俺はふと、ゲーム内での自分の姿が気になり始めた。
何しろログイン画面ではほとんど名前と初期装備を決めるだけだったので、自分の用紙がどのようになっているのかは解らなかった。
とりあえず、自分の目に見える範囲では、なんだか現実世界の自分とさほど変わらない気がする。

「そういえば……このブレスレット……」

ヴン、と、ブレスレットを意識した瞬間、目の前に白い画面が表示された。その画面には黒い文字で、このゲームの説明等が書かれてあり、そしてその他にもメニューも表示されていた。
とりあえず、ゲームの説明を見る前に「メニュー」の「装備」で自分の容姿を見てみる事にした（因みにユーザーネームの「Ｌｅｆｔ」は基本的に俺がオンラインゲームでいつも使う名前だ）

画面の中には凛々しく、そして、しっかりとした力強さを感じさせる少年が居た。

ていうか俺だった。ていうか脳内補正しすぎた。
真実を言えば、普通の少年であり、そして現実世界とほぼ同じ容姿をした姿の俺が居た。

「ゲームって、残酷だよな……」

せめてゲームの中だけでもイケメンになりたかった。

因みに俺の現在の装備だが、ただの普通の服に、腰には太刀（ていうか日本刀）。
タイプが「剣士」である事から、文字通り「刀（けん）を使う戦士」みた

いだ。

おっと、そろそろ星野と嶺浩を探さないとな。

俺は、広場の中を、二人を探すために駆け出した。

□□□ＮｏｗＬｏａｄｉｎｇ□□□

星野はすぐに見つかった。

やはり、星野は星野のままだった。格好は、文字通り普通の服だ。

動きやすいようになっているのか、軽装だ。

そして手には「弓」のような物を持っていた。

因みに、星野のユーザーネームは「Ｙｕｉ」だった。

「鳴海くん？」

「ああ。俺だ。星野は……弓使いか何かか？」

「そうみたいですね。タイプが『アーチェリー』でした。鳴海くんは、『剣士』という所でしょうか？」

「大当たり。で、嶺浩は？」

「まだ見つかってないんです。それはそうと、このゲームの説明、見てみましたか？」

「いや、まだ」

俺はブレスレットに意識を集中し、白いウィンドウを表示させる。

そして、『ゲーム説明』という画面を、タッチする。

Ｍｅｍｏｒｙ　ｗｏｒｌｄゲームルール説明

・戦闘方法は、手持ちの武器でモンスターを、自分の考える自由な動きで倒してください。

・戦闘終了後、倒したモンスターの情報（メモリ）を、ブレスレットに『コレクション』する事が出来ます。

・『コレクション』したモンスターメモリ（以下、Ｍ２）は、自分の能力として使用する事が出来ます。

・戦闘中に使用する事の出来るＭ２は、『メインメモリ』に入る５つです（ゲームを進めていくと、レベルアップ等の要因でレギュラーメモリの容量が増える場合があります）。

・戦闘中に、『サブメモリ』の中のＭ２を『メインメモリ』に入れ替える事が出来ます。

・『サブメモリ』の容量はＭ２、１０枠分です。

・『メインメモリ』、『サブメモリ』のどちらにも入れられなかったＭ２は、『バンクメモリ』に保存されます。一度戦闘に入ると、『バンクメモリ』からＭ２を引き出す事は出来ません。

・『メインメモリ』に選択したＭ２は、戦闘を重ねるごとにレベルアップしていきます。

「……つまり、倒したモンスターを『コレクション』して、そのM2をレベルアップしていく事がゲームのポイント、という事か」
「『コレクション』するモンスターも重要ですよね」
「それにしても、イマイチこのゲームの目的が解らないな」
「それは……うーん。まだテスト段階の物だからなのではないのでしょうか？」

この際目的はともかくとして、問題は戦闘だ。

まだ戦闘を経験していないので、『コレクション』も、『M2の使用方法』もイマイチ解らないが、そこはまあ、戦闘を経験していけばなんとかなるだろう。

それよりも、俺も星野もまだレベルは当然の事ながら、1だ。
とりあえず、まずはレベルアップの必要がある。

「あっ。そうだ鳴海くん。お互いの『ユーザーメモリ』を登録しておきませんか？」
「そうだな」

どうやらこのゲーム内で、ユーザーメモリ、つまりユーザー情報を登録すると、登録したプレイヤー同士のステータスや装備など、その状態を詳しく確認したりする事が出来る。
そして、登録ユーザー同士で連絡をとりあったりする事も出来るようだ。

まあ、出来る事はそれだけではないのだが、とりあえず今は登録を済ませておこう。

登録が終わり、俺と星野は今後の方針を練る為に、近場のカフェに入った。なんていうか、ゲームの中なのだが少しデート感覚になりそうだ。

「これからどうします？」
「そうだなあ。まずはとりあえず、レベルアップかな。所持金も満足に無い状態じゃどっちみち武器を買うことすら出来ない。それに、俺達の能力とか、戦闘方法とか、Ｍ２の使い方とか、色々と確認しなきゃいけない事が山ほどある」
「やはりそうなりますよね。よし、それではさっそく外に出ましょう」

意気揚々と、星野は席を立った。
というか、嶺浩の事を忘れている気がする。

「嶺浩くんの事なら、さっきの広場に「掲示板」という物があったので、そこにメッセージを残しておきましょう」

星野はすぐさまメッセージを残し、俺をずるずると引っ張るような形で、町の外へと出て行った。

□Ｌｅｆｔ：レベル１
メインメモリ：無し
サブメモリ：無し

□Ｙｕｉ：レベル１
メインメモリ：無し

サブメモリ：無し

１―２　メモリ

しばらく外での戦闘を星野と共にこなし、なんとかＭ２を使った戦闘にも慣れてきた。

そしていくつか、Ｍ２も入手する事が出来た。

この戦闘を経験してみて解ったのだが、このＭ２があるのと無いのとでは、かなり違う。例えば、最初の戦闘では、ただ単に俺は刀を振り回したり、星野は弓矢で攻撃、という事だけだったのだが、いくつかＭ２を入手してからは、戦闘方法にかなりバリエーションが出てきた。

例えば、「刀小僧」という、刀を持ったゆるきゃら風のモンスター（恐らくまだ序盤だからだろう）を倒して入手したＭ２は、「刀使いＬｖ１」というＭ２だった。

Ｌｖ１という事は恐らく、このメモリを使っていけば、ドンドン、レベルアップしていくのだろう。

そして、この「刀使い」というＭ２を使ってみると、刀の威力がいきなり向上した。つまり、刀を使った時の攻撃力が向上したのだ（試しに星野が使ってみたが、やはり『弓』の威力の向上は無かった）。

肝心の使い方はというと、『メモリブレスレット』の『メインメモリ』から、メモリを引き出す。メモリを引き出した際に、メモリはカード状に変化する。

そして、カード状に変化したメモリを「メモリブレスレット」に

スラッシュし、カードデータの読み取りが完了すれば、発動可能となる。

一見、めんどくさそうに見えるが、使用方法としては魔法を発動させるよりもシンプルで簡単だ。

メモリの引き出しは、頭で想像すればすぐにメインメモリが「空気上画面（エア・ディスプレイ）」に現れる。そこから選択すれば良いのだが、慣れれば頭の中で引き出したいＭ２をイメージするだけですぐにカード状となったＭ２が現れる。

ていうかあれだ。
この「カードをスラッシュする」という事がハマる。
大好き。
愛してる。

だってカッコイイじゃん！？

……だがしかし、発動までに隙が出来やすいという事は確かだ。

星野のような「弓」を使う遠距離タイプのプレイヤーなら、カードをスラッシュする暇はあるだろう。しかし、俺のような最前線でバリバリと斬って斬って斬りまくるような近距離タイプのプレイヤーにはこの「カードをスラッシュする」というシステムは扱いづらい。

しかしその反面、レベルが上がればそれを補えるぐらいの可能性を秘めている事は確かであり、俺が思うにこのゲームは他プレイヤーとの連携が重要なのではないのだろうか。

一人では攻略が難しいゲーム。

ていうか、このカードスラッシュシステム（俺命名）があるから、ブレスレットが少々ゴツイ事になっているのか。

因みに。

これで少しレベルが上がり、大分Ｍ２の扱いにも慣れてきた。

俺達だけでなく、手持ちのＭ２のレベルも上昇してきた。そして、モンスターを倒した時に手に入るのは経験値とＭ２だけではない。

ゲームお馴染みの「お金」も手に入る。

ゲーム開始直後は所持金が１０００Ｇだったのだが、今では５０００Ｇとなっている。

これなら、町に戻って道具や装備を整える事が出来るだろう。

「よし。そろそろ町へ戻ろう。嶺浩の事も気になるし」

「はいっ」

俺と星野は、町へ向かって歩き出した。

□Ｌｅｆｔ：レベル７

メインメモリ：「刀使いＬｖ５」、「回避Ｌｖ３」、「ジャンプＬｖ３」

サブメモリ：無し

□Ｙｕｉ：レベル７

メインメモリ：「回避Ｌｖ６」、「ジャンプＬｖ２」

サブメモリ：「刀使いＬｖ１」

□□□ＮｏｗＬｏａｄｉｎｇ□□□

町にたどり着くと、広場では、ざわめきが起こっていた。

「何だ？」

「一体、何が起こっているのでしょうか……」

このざわめきの正体は解らないが、とりあえず今の俺達の目的は嶺浩だ。

俺と星野は、ざわめく人々の間を通り、広場の「掲示板」へと向かった。

掲示板を確認してみると、俺達の残したメッセージにまだ何の反応も無い事から、まだ嶺浩がこの掲示板を見ていない事が解る。

一体、アイツは何処に行ったんだ？

とりあえず、今は嶺浩の事は置いておこう。

まず、このざわめきの原因を突き止めなくちゃならない。

俺と星野は、近くに居たプレイヤーに話しかけてみた。

話しかけてみたプレイヤーは背中に槍を付けてはいるが、不安そうな表情をしているばかりだったのだが、他の、周囲の連中よりはまだ落ち着いていたので、この人にしたのだ（因みに男）。

「あの、すみません。俺達、さっきまで外に居たので、このさわぎの原因が解らないのですが、何か知りませんか？」

「あ、ああ。……じ、実は、ゲームからログアウト出来なくなっているんだ」

「えっ！？」

そんなバカな。

メモリブレスレットを見てみても、ちゃんとログアウト画面は存在する。

「本当なんだって！　さっき、掲示板に急にクリェーション社から、ログアウト不能のメッセージが突然表示されて、それから皆大混乱さ」

「……！？」

俺と星野はあわてて、さっきの掲示板に駆け込んだ。

そして、メッセージ機能を開く。

クリエーション社からのお知らせ

ログアウト不能

そこには確かに、「クリエーション社からのお知らせ」という題名と、「ログアウト不能」とい　うそっけない文章が書き込まれて

いただけだった。

「そんな……ウソだろ」

メニューからログアウトを選んでタッチしても、ログアウトが行われない。

どういう事なんだ？

まだテスト段階だからなのか？

そもそも、これは故障なのか？

気がつけば、広場の時計はもう既に夜の１０時を指し示していた。

確か、テストを開始したのが午後１２時だったから……もうこのゲームの中に入ってから１０時間も経っているのか。

「あっ。鳴海くん。これっ！」

「っ。これは……」

掲示板に新たに表示されたのは、「クリエーション社からのお知らせ」だった。

気がつけば、俺達の周囲に他のプレイヤーが集まり、俺達の様子、というよりも掲示板の様子を見守っている。

俺は、掲示板のメッセージを開いた。

クリエーション社からのお知らせ

・この世界は、仮想空間だが、君達の体は仮想ではない。

・この世界での死は、現実での死となる。

・ＨＰは、自分の命と同様だ。

・ログアウトをするには、ある条件を満たすしかない。

・プレイヤー同士の戦闘も可能だ。

・記憶を使い、クリアを目指せ。

どういう事だ……これは故障なんかじゃない。故意なのか？
だとしたら、何故、こんな事をしたんだ？

この体は仮想じゃない。つまり生身。
ＨＰはプレイヤーの死と同様となる。
ログアウトをするにはある条件を満たさなければならない（ある条件ってなんだ？）。
しかも迷惑な事にプレイヤー同士の潰しあいも可能。
記憶を使い、クリアを目指せ……記憶とは、つまり「モンスターメモリ（Ｍ２）」？

ざわめく広場の中で、俺と星野はただ、呆然と立ち尽くしていた。

こうして、俺達の仮想空間での、実際の命を懸けたゲームが始まろうとしていた。

□Ｌｅｆｔ：レベル７
メインメモリ：「刀使いＬｖ５」、「回避Ｌｖ３」、「ジャンプＬｖ３」
サブメモリ：無し

□Ｙｕｉ：レベル７
メインメモリ：「回避Ｌｖ６」、「ジャンプＬｖ２」
サブメモリ：「刀使いＬｖ１」

１―３　戦闘

ログアウト不能という驚愕の事実を知ってから、一日が経った。

……よし、大丈夫。

落ち着いている。

俺は、宿のベッドから起きて、とりあえず状況を把握する。

ログアウト不能。

現実世界には、ある一定の条件を満たさないと元に戻る事は出来ない。

ならば、なんとかしてこの世界、つまり、Ｍｅｍｏｒｙ　ｗｏｒｌｄの攻略を進めていくしかない。

それ以外、俺には、いや、俺達には、選択肢など、無いのだ。

ただ、この状況下で、時間が経った所為なのか、プレイヤーの大半は冷静になってきた。

攻略を目標にする奴も居れば、仲間を集めて攻略を試みようとする者も居る。

俺は……とりあえず、今、自分に出来る事をしてみようと思った。

まあ、えらそうに言ってみたものの、要はレベルアップだ。

今日は星野とは一緒に行動は、しない。

嶺浩を探す事もかねているので、とりあえず別行動で嶺浩を探しつつ、戦闘経験を積んでおこう、という事になった。

俺は、広場へと足を踏み入れる。
この広場には様々な商店も展開しているので、装備を整えるのには丁度良いだろう。

真っ先に俺が向かったのは、武器商人の所だ。
つまり、武器屋。

品揃えを見てみると、今の俺の所持金、４９００Ｇがあればどの装備でも、例え一番高い装備でも購入する事は可能なのだが、他の道具等も買わなければならないので、とりあえずは値段だけを見に来たのだった。

どの武器も、初期装備の、今現在持っている武器の１、２、段階上ぐらいのレベルだ。
ただ、初期選択武装の「剣・太刀・双剣・槍・杖・銃・弓・ハンマー」以外の武器も、武器屋にはある。

例えば、「サイス」がそうだ。

「サイス」とは、一番解りやすいイメージだと、「死神の鎌」、だろうか。
まさにあんな感じの大鎌が店にはいくつかあった。
ただ、威力的には現在持っている「太刀」となんら変わらない。
強いて言うならば、リーチが違う、という所だろうか。

悩む……。しかし、防具も必要なのだが……。

結局、俺は武器の購入は見送る事にした。
武器屋では、武器の購入だけでなく、消耗した武器の手入れ等も

行ってくれるので、また来る事にはなるだろう。

□□□ＮｏｗＬｏａｄｉｎｇ□□□

俺は、町の外に出る事にした。
とりあえず、これからこのゲームはどんな展開を見せるのか解らないので、戦闘経験を少しでも積んでおく事が大切だと思ったからだ。

今回は、昨日来たエリアよりも、少しだけ、奥の方へと足を踏み入れてみた。
ここらまで来ると、出現するモンスターのレベルも違ってくる。しかし、それは同時にさっきの場所よりも多少強力なＭ２も手に入るかもしれない、という事だ。

――――……どうやらさっそくおでましのようだ。

出現したモンスターは、オークだった。

手には斧を持っている。
掲示板で得た情報によると、このゲーム内ではゴブリンとオークの違いといえば、手に斧を持っているか、こんぼうを持っているかぐらいの違いらしい。

それにしても強そうだな。
倒したらどんなＭ２が手に入るんだろう。

オークがさっそく攻撃を仕掛けてくる。
俺は、さっそくＭ２「回避」を左手に構成し、スラッシュ。
直後に足が身軽になり、軽々とオークの振り上げられた斧を、サイドステップでかわす。
この辺りの技能は昨日、約８、９時間ぶっ通しで戦いまくった賜物だろう。
にしてもやはり、このカードをスラッシュするのは色々と隙が多い気がする。開発者は何を思ってこんな機能を取り入れたんだか。
オークは、動きがのろい。
この間に俺は接近し、そして一気に太刀で斬りつける。
ダメージは、どうやら通ったようだ。
「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」
「ッ！」
うめき声を上げて、今度は斧を横薙ぎに振るおうと、構えをとるオーク。
だがしかし、やはり動きはのろい。
俺はすぐさま左手に「ジャンプ」を構成。そしてスラッシュ。
地面に足を踏み込み、そして、高く跳躍する。

俺が空中に跳躍したのと、オークが斧を振るったのが同時だったので、危なかった。

空中で、今度は左手に「刀使い」を構成し、スラッシュ。

これにより、太刀の威力が上昇する。

「うおおッッッ！！」

俺らしくもない、大声を上げて、俺はオークの真上から太刀を一気に――――振り下ろす。

ズッシャアアアアアアアアアアアアアッ！！　と、振り下ろした太刀がオークを真っ二つに切断した。

オークのＨＰも尽きたのか、そのままオークの体が光の粒子となり、俺のメモリブレスレットに「コレクション」される。

□入手Ｍ２

アックスＬｖ４

「メインメモリ」に保存しますか？　Ｙｅｓ／Ｎｏ

ふむ。どうやら倒したモンスターのレベルによって入手した時のＭ２のレベルも変わる、という事か。

ここは「Ｎｏ」を選択。

□「斧使いＬｖ４」の保存先を選択してください。

「サブメモリ」

↓「バンクメモリ」Ｙｅｓ

今のところ、「斧」の武器はまだ持っていないので、「バンクメモリ」行きだな。

町に「斧」を持っている奴が居たら、別のＭ２と交換してもらおう。

それに、Ｍ２は町で売却する事も出来る。

俺と星野が昨日まで狩場として使っていた所で入手したＭ２でも一枚平均して１５０Ｇ～２００Ｇで売れたので、この「斧使い」ならば一枚５００Ｇぐらいで売れたりするのかもしれない。

「バンクメモリ」には最大百枚ぐらいしか保存出来ないので、小まめに売却しないとすぐに一杯になってしまいそうだ。

とにかく、今日の所はここで戦闘経験を積んで、プレイヤーレベル、Ｍ２レベル、この両方のレベルアップを目標としよう。

……それにしても、さっきは本当にガラにも無く叫んでしまったな。

やっぱり心のどこかで俺は、「死の恐怖」にとらわれているのか

もしれない……。

□□□ＮｏｗＬｏａｄｉｎｇ□□□

□Ｌｅｆｔ：レベル１０
メインメモリ：「刀使いＬｖ８」、「回避Ｌｖ６」、「ジャンプＬｖ６」
サブメモリ：無し

疲れた……。
つーか今日はずっとオーク以外と戦ってないぞ……。

どうやらこの辺りはオーク以外のモンスターは出現しないようだ。もう少し奥の方へと進めば他のモンスターも出てくるだろうが、今日はもう止めておこう。

「バンクメモリ」もオークのＭ２で大半が埋まってきたし。

これまでに何度かパーティを組んでいると思われるプレイヤー達と会い、嶺浩についての情報を聞き込みしたのだが、皆、それらしい人物には思い当たらなかった。

それに、今日は自己ノルマのレベル１０まで到達した事だし、よしとしよう。

それと、レベルが１０に達した瞬間、「メインメモリ」の容量が一つ分増えた。

とは言っても、今の所は「刀使い」、「回避」、「ジャンプ」以外に使用するＭ２は無いが。

とりあえず、この道中に滝のような所があったので、そこに行って顔でも洗ってこよう。掲示板に開示されていた情報によると、滝の辺りにはモンスターは出現しないらしいし。

幸い、町で購入した回復アイテムはまだまだ残っている。戦闘があったとしても、乗り切れるだろう。

そしてオークとの戦闘を経験して思ったのだが、モンスターと戦う際はある程度事前にＭ２を使用しておいた方が良いのかもしれない。

敵の攻撃に反応してからじゃ遅すぎるし（オークだからなんとかなったが）、Ｍ２にも一応効力が発揮する時間もある程度ある。

もっと素早い敵が現れれば、それでおしまいだ。

滝に着いた。

一言で滝、と言っても、流れ自体は比較的穏やかで、見た所は安全だ。元々、プレイヤーの休憩ポイントとして存在しているのだろう。

滝の溜まりはちょっとした池のようになっていて、水も見た所、綺麗だ。

「つ、疲れた……とにかく水を……」

ピタッ、とフラフラになりながらも歩を進めていた俺の足がそこで止まった。
理由は簡単だ。

目の前に、星野が居た。

それはいい。
いいのだが。
問題はその状況だ。

どうやら冷静に考えてみてみると、星野はこの滝で水浴びをしていたようで、側にはキチンと折りたたまれた服が置いてあった。

そして、今の星野は勿論、その、なんというか、生まれたままの姿でそこに居たのだ。

つまりは全裸だった。

「……鳴海、くん？」

硬直しながらも、星野は両腕で自分のその決して小さいとは言えない、それなりにふくらみのある胸を隠す。

「……よ、よう」
「どうして、ここに……？」
「ははは。決まってるじゃないか星野。疲れを癒す為だよ。実はさっきまでずっとオークと戦いっぱなしでな。そして喉が渇いたからちょっと水を飲もうかな～なんて」
「そう、ですか……」

「……」

「……」

俺はその後、容赦なく弓を次々と放つ星野から逃げるために、すぐさま滝から撤退した。

ていうか不可抗力だろ。これは。

……目の保養にはなったけどな！！

□Ｌｅｆｔ：レベル１０
メインメモリ：「刀使いＬｖ８」、「回避Ｌｖ６」、「ジャンプＬｖ６」
サブメモリ：無し

□Ｙｕｉ：レベル１０
メインメモリ：「回避Ｌｖ１０」、「ジャンプＬｖ８」
サブメモリ：無し

1―3　戦闘（後書き）

M2名「アックス」→「斧使い」に修正

１―４　トレード

説明が今まであやふやだったが、このＭｅｍｏｒｙ　ｗｏｒｌｄのスタート地点、「中央広場」には、「掲示板」という物がある。

これは、皆が集めた情報等を更新する事によって、様々な人と情報を共有する事が出来るというワケだ。

ただし、情報にはある種の噂のような物もあり、そういった情報は「噂」カテゴリに更新するようになっており、そして確定情報は「確定」カテゴリに更新するようになっている。

これにより、情報の混乱を防ぐ為だろう。

因みにこの掲示板だが、町の至るところに設置されているだけでなく、メモリブレスレットに掲示板のユーザー情報として登録しておけば、掲示板にワザワザ行かなくても、メモリブレスレットから情報の更新が可能となっている。

全く、便利な所は相変わらず便利だ。

今日はとりあえず、そろそろ本格的に嶺浩を探そう、という事になった。何しろ、ゲーム開始直後に会おうと言っているのに、かれこれ数日は会っていない。

この調子だと、何処まで進んでいるのかも解らない。

情報収集がてら、そろそろ装備を整えようと思い、俺は星野と共に、再び、武器屋等がある市場へと向かった。

中央広場からすぐの所にあるので、こういう所も便利だ。

市場で、とりあえず軍資金を増やす為に昨日入手した「斧使い」のＭ２を半分残してから売却。合計で７５００Ｇ増えた。
うおっ。オークすげえ。

因みに、この売却もしくは、Ｍ２のトレードのやり取りはまず、Ｍ２を記憶（データ）ではなく、カード化させなければならない。
カード化させたＭ２を、例えばトレードし、入手した場合、カード化したＭ２を記憶（データ）へと変換し、自分のメモリブレスレットに「コレクション」すればＯＫだ。

売却した後は、残った「斧使い」Ｍ２をトレードする為に、トレード場へと向かった。
ここは、広場のような所で、この場所に来れば、来た人間が「Ｍ２のトレード待ち」という事が一目で解る。

俺と星野がトレード場に入って真っ先に向かったのは、「トレードボード」。ここには「〇〇のＭ２のトレード希望」と言った風に、トレードしたいＭ２を持っている相手に対して、宣伝を行う事が出来る。

因みにこの「トレードボード」もメモリブレスレットにユーザー情報として登録が可能となっており、随時、最新トレード情報の更新が行われ、これも何処にいても一目で解る。

さっそく、俺と星野はトレードボードをユーザー情報として登録。

これで、一目で最新トレード情報が可能となった。

さて、まずは「斧使い」Ｍ２のトレード希望者を探そう。

手持ちの「斧使い」は残り１５枚。

トレードボードから、検索項目をＭ２にし、Ｍ２名「斧使い」で検索をかける。

□「斧使い」に関するトレード情報について１８件ＨＩＴしました。

・「斧使い」トレード希望！
交換Ｍ２：「刀使いＬｖ１」
詳しい条件を見る。

・生産職です。武器生産に必要な為、「斧使い」Ｍ２を複数枚トレード希望。
交換Ｍ２：「回避Ｌｖ１」、「刀使いＬｖ１」
詳しい条件を見る。

・「弓使い」Ｍ２と「斧使い」Ｍ２トレード希望。
交換Ｍ２：「弓使いＬｖ５」
詳しい条件を見る。

ｅｔｃ．ｅｔｃ．．．．．．

「あっ。私、「弓使い」のＭ２が欲しいです」

「確かに、それなりにＬｖも上がってるようだし、丁度良いな」

とりあえず、「詳しい条件を見る」を選択する。

条件を見てみると、それほど特に詳しい事は書いていなかった。

さっそく、俺はその人にコンタクトを取るべく、「詳しい情報を見る」に書いてあった連絡先に通話回線を開いた。

話を聞いてみると、その人はどうやら元「アーチャー」だったらしいのだが、新しく組む事になった同じパーティのメンバーに「アーチャー」が居た、という事で職業（タイプ）を「アックス」に変更するらしい。

なるほど。

道理で「弓使い」Ｍ２のＬｖが５もあるワケだ。

相手の都合も合うようで、俺達は「中央広場」を集合場所にして、すぐに集まった。

女性プレイヤーだったようで、星野も話しかけやすかったのか、元「アーチェリー」として、どんな動きをすればいいのかを聞いたりしている。

元々星野はよくネットゲームとかは好きでやっていたらしいのだが、このような事態となるとやはり少しばかり勝手が違ってくる所為なのか、熱心に「アーチェリー」の立ち回りの話を聞いている。

「まあ、私もまだそこまで極めたワケじゃないから参考にならないかもしれないけど、頑張ってね」

それだけ言い残して、その女性プレイヤーは去って行った。

なんだかワザワザ「アーチェリー」から「アックス」にタイプチェンジしなければいけないので大変だな、と言ったら、元々色々な武器を使ってみるつもりだったらしく、問題は無いらしいのだが、それでも大変だな、と思いつつ、その背中を見送った。

そして、今現在の俺と星野の状態はというと、

□Ｌｅｆｔ：レベル１０
メインメモリ：「刀使いＬｖ８」、「回避Ｌｖ６」、「ジャンプＬｖ６」
サブメモリ：無し

□Ｙｕｉ：レベル１０
メインメモリ：「弓使いＬｖ５」「回避Ｌｖ１０」、「ジャンプＬｖ８」
サブメモリ：無し

だ。

手持ちＭ２的にはまだまだだが、一応ここら周辺のモンスター程度ならば相手にならないぐらいにはレベルアップした。

そして、残りの「斧使い」Ｍ２を、上手く他のＭ２と交換（トレード）し、ある程度、色々な種類のＭ２が集まった。

今度こそ武器屋に行こうと思ったが、その前に誰かのオススメ武

器情報の確認の為にメモリブレスレットから「掲示板」を開いた。

今日も色々な情報が更新されており、今朝確認した時よりも少し情報が更新されていた。

因みにこの掲示板だが、今最も注目されているレビュアー（更新するプレイヤーの事をそう呼んでいるらしい）が、「漆黒の銃撃手（ブラックトリガー）」というプレイヤーらしい。

いや、実際のユーザーネームは「Ｔｒｉｇｇｅｒ」という物なのだが、その「Ｔｒｉｇｇｅｒ」というプレイヤーを実際に目撃したプレイヤーによると、黒い衣を身に纏い、そして黒き銃で戦うその姿から名づけられたいわゆる「通り名」らしい。

通り名。

それはすなわち、強豪プレイヤーである何よりの証明だ。

そしてその「漆黒の銃撃手（ブラックトリガー）」がなぜ、注目されているのかというと、なによりその攻略スピードの速さだ。

まだ数日しか経ってない中で、その「漆黒の銃撃手（ブラックトリガー）」はもう第一のボスの所まで攻略したらしい。

まだ実際に戦ってはいないのだが、それまでの攻略上をＵＰしてくれたり、色々な新発見情報を更新してくれたりと、実際にその貢献度は高い。

この「漆黒の銃撃手（ブラックトリガー）」は小まめに序盤の範囲であれ、様々な情報を提供している、というワケで、注目度が最前線攻略組よりも高い。

貢献度、注目度が高いユーザー。
「漆黒の銃撃手（ブラックトリガー）」。
町にはその「漆黒の銃撃手（ブラックトリガー）」に憧れてか、黒い衣を身に纏っているプレイヤーも少なくは無い。
コスプレイヤーかお前らは。
「とにかく、さっさと嶺浩を探してやらないとな」
「そうですね。でも、情報が乏しいですし……」
「ったく。嶺浩も、この漆黒の銃撃手（ブラックトリガー）さんに探してもらいたいな」
噂の漆黒の銃撃手（ブラックトリガー）ならばすぐに見つけ出してくれそうだ。
「ほう。そりゃ手間が省けたな」
聞き覚えのある声がした。
「よう。久しぶりだな」
俺達の背後から、突如、捜し求めていた（？）、嶺浩が顔を出した。
「「うっひゃあああああああ！？」」
俺と星野は同時にびっくりした声を上げた。
ていうか星野のびっくりした声がすげえ可愛いな。

「あっはっはっ。すまんすまん」

……あれだけ苦労して探したのに、見つかる時は意外とすぐに見つかる物だな。

「全く。一体何処に行ってたんだよ」

「ああ。ちょっとな」

そして、嶺浩の格好を見てみると、なにやら黒いボロボロのマントを身に纏い、そして腰のホルスターには黒い拳銃を収めている。

……ていうか。これじゃあ、まるで……

「なんだよ。お前も『漆黒の銃撃手（ブラックトリガー）』のコスプレか？」

「は？　『漆黒の銃撃手（ブラックトリガー）』？　……ああ。それは俺だ」

嶺浩が、実は漆黒の銃撃手（ブラックトリガー）だったと。

なるほどなるほど。

だから今まで見つからなかったのか。

ボス戦手前まで攻略を進めていたのだから、そりゃあ見つかるワケ無いよな。

……は？

□Ｌｅｆｔ：レベル１０

メインメモリ：「刀使いＬｖ８」、「回避Ｌｖ６」、「ジャンプＬｖ６」

サブメモリ：無し

□Ｙｕｉ：レベル１０
メインメモリ：「弓使いＬｖ５」、「回避Ｌｖ１０」、「ジャンプＬｖ８」
サブメモリ：無し

□Ｔｒｉｇｇｅｒ：レベル１６
メインメモリ：「銃使いＬｖ１５」、「回避Ｌｖ１２」、「ジャンプＬｖ１３」、「地形制御Ｌｖ８」、「念力屈折Ｌｖ４」
サブメモリ：「連射Ｌｖ７」、「防御Ｌｖ３」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7000y/

Memory world

2011年11月22日00時55分発行